

日本土壌肥料学会 2010 年度北海道大会 公開シンポジウム

テーマ：「地球の^{いのち}生命を育む土」 - 食料生産と環境、そして未来に果たす土の役割 -

日時：2010 年 9 月 9 日（木）13:00～16:10

場所：クラーク会館講堂

あいさつ 大会運営委員長 長谷川周一（13:00～13:05）

テーマの解題 酪農学園大学 教授 松中照夫（13:05～13:15）

1. 土 - 地球の皮膚 - を守る農業（13:15～13:55）

北海道大学大学院 教授 波多野隆介

ねらい：^{いのち}生命を育む土は、^{せいめい}生命活動により更新される地球の皮膚（ジオデルマ）である。20 世紀の 100 年間、科学の進歩は農業技術を飛躍的に向上させ、世界の人口を 20 億人から 60 億人に増やしたが、地球は怪我をってしまった。土は温室効果ガスを大気に吐き出し、多量の栄養を海に流すといった、地球温暖化や富栄養化が進行している。農業は食料生産とともに土を守る持続可能な産業である。農業による地球の手当てについて考える。

2. 北海道における環境保全型農業 - クリーン農業の歩み（13:55～14:35）

北海道立総合研究機構中央農業試験場 農業環境部長 志賀弘行

ねらい：北海道では、農業の自然循環機能を維持増進させるために、有機物の施用などによる土づくりを基本に、化学肥料や化学農薬の使用を必要最小限にとどめるクリーン農業やそれらを基本的に使用しない有機農業などの環境保全型農業を推進している。これらの考え方を示すとともに、技術開発の現状について、主に土壌管理や環境保全の側面から紹介する。

3. 食料生産と環境・生態を調和させる未来の自立型農業（14:45～15:25）

北海道大学大学院 教授 大崎 満

ねらい：有機農業だけで地球上の人類に食料を供給するのは難しい。一方、これまでの農業生産を支えてきた化学肥料にも製造上のエネルギーコストは膨大になり、同時に肥料原料の枯渇という深刻な問題も抱えている。化石燃料に依存した農業の先行きに明るい未来は見えてこない。エネルギーも食料生産もともに自給を目指した新しい北海道農業を提案する。

4. パネルディスカッション（15:30～16:10）

パネラー

小林ヨシ子（酪農業、札幌 A・C グループ・代表）

前濱喜代美（消費者、コープさっぽろ・理事、組合員活動委員長）

関 俊一（政策立案者、北海道農政部食の安全推進局・主幹）

波多野隆介（基調講演者、北海道大学大学院・教授）

志賀弘行（基調講演者、北海道立総合研究機構中央農試・農業環境部長）

大崎 満（基調講演者、北海道大学大学院・教授）

長谷川周一（学会大会運営委員長、北海道大学大学院・教授）

コーディネーター

山縣真人（日本土壌肥料学会北海道支部長）